

茨海小学校

宮沢賢治

青空文庫

私が茨ばらうみ海の野原に行ったのは、火山弾かざんだんの手頃てごろな標本を採るためと、それから、あそこに野生の浜茄はまなすが生えているという噂うわさを、確かめるためとでした。浜茄はご承知のとおり、海岸に生える植物です。それが、あんな、海から三十里もある山脈を隔へだてた野原などに生えるのは、おかしいとみんな云いうのです。ある人は、新聞に三つの理由をあげて、あの茨海の野原は、すぐ先せんごろ頃まで海だったということを論じました。それは第一に、その茨海という名前、第二に浜茄の生えていること、第三にあすこの土を嘗なめてみると、たしかに少し鹹しおいからのような気がすること、とこう云うのですけれども、私はそんなことはどれも証しょうこ拠こにならないと思

ます。

ところが私は、浜茄をとうとう見附みつけませんでした。尤もつとも私が見附けなかったからと云つて、浜茄があすこにないというわけには行きません。もし反対に一本でも私に見当つたら、それはあるということの証拠にはなりましよう。ですからやっぱりわからな
いのです。

火山弾の方は、はじが少し潰つぶれてはいましたが、半日かかつてとにかく一つ見附けました。

見附けたのでしたが、それはつい寄附させられてしまいました。誰たれに寄附させられたのかつていうんですか。誰につて校長にですよ。どこの学校？ ええ、どこの学校つて正直に云つちまいます

とね、茨海狐きつね小学校です。愕おどろいてはいけません。実は茨海狐小学校をそのひるすぎすつかり参観して来たのです。そんなに変な顔をしなくてもいいのです。狐にだまされたのはちがいます。狐にだまされたのなら狐が狐に見えないで女とか坊ぼうさんとかに見えるのでしよう。ところが私のはちゃんと狐を狐に見たのです。狐を狐に見たのが若もしだまされたものならば人を見るのも人にだまされたという訳です。

ただ少しおかしいことは人なら小学校もいいけれど狐はどうだろうということですがそれだつてあんまりさしつかえありません。まあも少しあとを聞いてごらん下さい。大丈夫だいじょうぶ狐小学校があるということがわかりますから。ただ呉くれ呉くれも云つて置きますが

狐小学校があるといつてもそれはみんな私の頭の中にあつたと云うので決して偽うそではないのです。偽でない証拠にはちゃんと私がそれを云つていゝのです。もしみなさんがこれを聞いてその通り考えれば狐小学校はまたあなたにもあるのです。私は時々斯こう云う勝手な野原をひとりで勝手にあるきます。けれども斯こう云う旅行をするとあとで大へんつかれます。殊ことにも算術などが大へん下手になるのです。ですから斯こう旅行のはなしを聞くことはみなさんにも決して差さ支しえつかありませんがあんまり度たび々たびうつかり出いかけることはいけません。

まあお話をつづけましょう。なあにほんとうはあの茨いばらやすすきの一いっ杯ぱい生せいえた野原の中で浜茄などをさがすよりは、初めから狐

小学校を参観した方がずうつとよかつたのです。朝の一時間目からみていた方が参考にもなり、又また面白おもしろかつたのです。私のみたのは今も云いました通り、午后ごごの授業です。一時から二時までの間の第五時間目です。なかなか狐の小学生には、しっかりした所がありますよ。五時間目だつて、一人もあ厭あきてるものがないんです。参観のもようを、詳くわしくお話くわしましょうか。きつとあなたにも、大へん参考になります。

浜茄は見附からず、小さな火山弾を一つ採すつて、私は草すわに座すわりました。空がきらきららの白いうろこ雲で一杯でした。茨には青い実がたくさんつき、萱かやはもうそろそろ穂ほを出しかけていました。太陽が丁度空の高い処ところにかかっていますから、もうおひるだと

いうことがわかりました。又じっさいお腹なかも空すいていました。そこで私は持つて行ったパンの袋ふくろを背囊はいのうから出して、すぐ喰たべようとしたが、急に水がほしくなりました。今まで歩いたところには、一とこだつて流れも泉もありませんでしたが、もしかも少し向うへ行つたら、とにかく小さな流れにでもぶつつかるかも知れないと考えて、私は背囊の中に火山弾を入れて、面倒めんどうくさいのでかけ金もかけず、締革しめかわをぶらさげたまませなかにしよい、パンの袋だけ手にもつて、又ぶらぶらと向うへ歩いて行きました。何べんもばらがかきねのようになった所を抜ぬけたり、すすきが栽うえ込みこみのように見える間を通つたりして、私は歩きつづけました。が、野原はやつぱり今まで通り、小流れなどはなかつたのです。

もう仕方ない、この辺でパンをたべてしまおうと立ちどまったとき、私はずうつと向うの方で、ベルの鳴る音を聞きました。それほどこの学校でも鳴らすベルの音のようで、空のあの白いうろこ雲まで響ひびいていたのです。この野原には、学校なんかあるわけはなし、これはきつと俄にわかに立ちどまった為ために、私の頭がしいんと鳴ったのだと考えても見ましたが、どうしても心からさっきの音を疑うわけには行きませんでした。それどころじゃない、こんどは私は、子供らのがやがや云う声を聞きました。それは少しの風のために、ふつとはつきりして来たり、又俄かに遠くなったりしました。けれどもいかにも無邪むじやき気な子供らしい声が、呼んだり答えたり、勝手にひとり叫さけんだり、わあと笑ったり、その間には太い

底力のある大人の声もまじって聞えて来たのです。いかにも何か面白そうなのです。たまらなくなつて、私はそっちへ走りました。さるとりいばらにひっかけられたり、窪くぼみにどんと足を踏ふみこんだりしながらも、一生けん命そっちへ走つて行きました。

すると野原は、だんだん茨が少なくなつて、あのすずめのかたびらという、一尺ぐらいのけむりのような穂を出す草があるでしょう、あれがたいへん多くなつたのです。私はどしどしその上をかきました。そしたらどう云うわけか俄かに私は棒か何かで足をすくわれたらしくどたと草に倒たおれました。急いで起きあがつて見ますと、私の足はその草のくしゃくしゃやつれた穂にからまつているのです。私はにが笑いをしながら起きあがつて又走りました。

又ばったりと倒れました。おかしいと思つてよく見ましたら、そのすずめのかたびらの穂は、ただくしゃくしゃにもつれているのじゃなくて、ちゃんと両方から門のように結んであるのです。一種のわなです。その辺を見ますと実にそいつが沢山たくさんつくつてあるのです。私はそこでよほど注意して又歩き出しました。なるべく足を横に引きずらず抜きさしするような工合ぐあいにしてそつと歩きましたけれどもまだ二十歩も行かないうちに、又ばったりと倒されてしまいました。それと一いっしょ緒に、向うの方で、どつと笑い声が起り、それからわあわあはやすのです。白や茶いろや、狐の子どもらがチョッキだけを着たり半ズボンだけはいたり、たくさんたくさんこつちを見てはやしているのです。首を横にまげて笑つ

ている子、口を尖^{とが}らせてだまつている子、口をあけてそらを向いてはあはあはあはあ云う子、はねあがってはねあがって叫んでい
る子、白や茶いろやたくさんいます。ああこれはとうとう狐小学
校に来てしまった、いつかどこかで誰^{たれ}かに聴^きいた茨^{ばらうみ}海狐小学校
へ来てしまったと、私はまっ赤になつて起きあがって、からだを
さすりながら考えました。その時いきなり、狐の生徒らはしいん
となりました。黒のフロックを着た先生が尖つた茶いろの口を閉
じるでもなし開くでもなし、眼^めをじつと据^すえて、しずかにやって
来るのです。先生といつたつて、勿^{もちろん}論狐の先生です。耳の尖つ
ていたことが今でもはつきり私の目に残っています。俄かに先生
はぴたりと立ちどまりました。

「お前たちは、又わなをこしらえたな。そんなことをして、折せつか角かくおいでになったお客さまに、もしものことがあつたらどうする。学校の名誉めいよに関するよ。今日はもうお前たちみんな罰ばつしなければならぬ。」

狐の生徒らはみんな耳を伏ふせたり両手を頭にあげたりしよんぼりうなだれました。先生は私の方へやって来ました。

「ご参観でいらつしやいますか。」

私はどうせ序ついでだ、どうなるものか参観したいと云つてやろう、今日は日曜なんだけれども、さつきベルも鳴つたし、どうせ狐のことだからまたいい加減の規則もあつて、休みだというわけでもないだろうと、ひとりです勝手に考えました。

「ええ、ぜひそう願いたいのです。」

「ごしょうかい紹介はありますか。」

私はふと、いつか幼年画報に出ていたたけしという人の狐小学校のスケッチを思い出しました。

「画家のたけしさんです。」

「紹介状はお持ちですか。」

「紹介状はありませんがたけしさんは今はずいぶん偉えらいですよ。美術学院の会員ですよ。」

狐の先生はいけませんというように手をふりました。

「とにかく、紹介状はお持ちにならないですね。」

「持ちません。」

「よろしゅうございます。こちらへお出で下さい。ただ今丁度ひるのやすみでございますが、午後の課業をご案内いたします。」

私は先生の狐について行きました。生徒らは小さくなって、私を見送りました。みんなで五十人は居たでしょう。私たちが過ぎてから、みんなそろそろ立ちあがりました。

先生はふつとうしろを振りかえりました。そして強く命令しました。

「わなをみんな解け。こんなことをして学校の名誉に関するじゃないか。今に主謀者は処罰するぞ。」

生徒たちはくるくるはねまわってその草わなをみんなほどいて居りました。

私は向うに、七尺ばかりの高さのきれいな野ばらの垣根かきねを見ました。垣根の長さは十二間はたしかにあつたでしょう。そのまん中に入り口があつて、中は一段高くなつていました。私は全くそれを垣根だと思つていたのです。ところが先生が

「さあ、どうかお入り下さい。」と町寧ていねいに云うものですから、

その通り一足中へはいりましたら、全く愕おどろいてしまいました。そ

こは玄関げんかんだつたのです。中はきれいに刈かり込んだみじかい芝生しばふ

になつていてのばらでいろいろしきりがこさえてありました。そ

れに靴ぬぎくつもあれば革かわのスリッパもそろえてあり馬の尾を集めて

こさえた払子ほつすもちゃんとぶらさがっていました。すぐ上り口に校

長室と白い字で書いた黒札くろふだのさがつたばらで仕切られた室へやがあ

りそれから廊下ろうかもありませぬ。教員室や教室やみんなばらの木できれいにしきられていました。みんな私たちの小学校と同じです。ただちがうところは教室にも廊下にも窓のないことそれから屋根のないことですが、これは元来屋根がなければ窓はいらない筈はずですからおまけに室の上を白い雲が光って行ったりしますから、実に便利だろうと思ひました。校長室の中では、白服の人の動いてゐるのがちらちら見えます。エヘンエヘンと云つてゐるのも聞えます。私はきよろきよろあちこち見まわしてましたら、先生が少し笑つて云いました。

「どうぞスリッパをお召めしなすつて。只ただいま今校長に申しますから

。」

私はそこで、長靴をぬいで、スリッパをはき、背はいのう囊をおろして手にもちました。その間に先生は校長室へ入って行きましたが、間もなく校長と二人で出て来ました。校長は瘡やせた白い狐で涼すずしそうな麻あさのつめえりでした。もちろん狐の洋服ですからずぼんには尻尾しっぽを入れる袋もついであります。仕立賃も廉やすくはないと私は思いました。そして大きな近眼鏡をかけその向うの眼はまるで黄き金いろでした。じっと私を見つめました。それから急いで云いました。

「ようこそいらつしやいました。さあさあ、どうぞお入り下さい。運動場で生徒が大へん失礼なことをしましたそうで。さあさあ、どうぞお入り下さい。どうぞお入り。」

私は校長について、校長室へ入りました。その立派なこと。卓の上には地球儀ちきゅうぎが置いてありましたしうしろのガラス戸棚とだなにはにわとり鶏の骨格やそれからいろいろのわなの標本、剥製はくせいの狼おおかみや、さまざまの鉄砲てっぽうの上手に泥どろでこしらえた模型、獵師りょうしのかぶるみの帽子ぼうし、烏打帽から何から何まですべて狐の初等教育に必要なくらいのものはみんな備えつけられていました。私は眼を円くして、ここでもきよろきよろするより仕方ありませんでした。そのうち校長はお茶を注ついで私に出しました。見ると紅茶です。ミルクも入れてあるらしいのです。私はすっかり度胆どぎもをぬかれました。

「さあどうか、お掛かけ下さい。」

私はこしかけました。

「ええと、失礼ですがお職業はやはり学事の方ですか。」校長がたずねました。

「ええ、農学校の教師です。」

「本日はおやすみでいらつしやいますか。」

「はあ、日曜です。」

「なるほどあなたの方では太陽曆れきをお使いになる関係上、日曜日がお休みですな。」

私はちよつと一寸変な気がしました。

「そうするとおうちの方ではどうなるのですか。」

狐の校長さんは青く光るそらの一ところを見あげてしずかに鬚ひげをひねりながら答えました。

「左様さよう、左様、至極しごくご尤もつともなご質問です。私の方は太陰曆を使う関係上、月曜日が休みです。」

私はすっかり感心しました、この調子ではこの学校は、よほど程度が高いにちがいない、事によると狐の方では、学校は小学校と大学の二つきりで、或あるはこの茨海小学校は、中学五年程度まで教えるんじゃないかと気がつきましたので、急いでたずねました。

「いかがですか。こちらの方では大学校へ進む生徒は、ずいぶん沢山さわございますか。」

校長さんが得意そうにまるで見当ちが違いの上の方を見ながら答えました。

「へい。実は本年は不思議に実業志望が多ございました、十三人の卒業生中、十二人まで郷里きょうりに帰って勤労に従事いたして居ります。ただ一人だけ大谷地おおやち大学の入学試験を受けまして、それがいかにもうまく通りましたので、へい。」

全く私の予想通りでした。

そこへ隣りのとな教員室から、黒いチョッキだけ着た、がさがさした茶いろの狐の先生が入って来て私に一礼して云いいました。

「武田金一郎をどう処罰いたしましたしょう。」

校長は徐ろおもむにそちらを向いてそれから私を見ました。

「こちらは第三学年の担任です。このお方は麻生あそ農学校の先生です。」

私はちよつと礼をしました。

「で武田金一郎をどう処罰したらいいかというのだね。お客さまの前だけれども一寸呼んでおいで。」

三学年担任の茶いろの狐の先生は、うやうや恭しく礼をして出て行きました。間もなく青いこうしじま格子縞の短い上着を着た狐の生徒が、今の先生のうしろについてすごすごと入つて参りました。

校長はおうよう鷹揚にめがねを外はずしました。そしてその武田金一郎という狐の生徒をじつとしばらくの間見てから云いました。

「お前がああ草わなを運動場にかけるようにみんなに云いつけたんだね。」

武田金一郎はしやんとして返事しました。

「そうです。」

「あんなこととして悪いと思わないか。」

「今は悪いと思います。けれどもかける時は悪いと思いませんでした。」

「どうして悪いと思わなかった。」

「お客さんを倒たおそうと思ったのじゃなかったからです。」

「どういう考かんがえでかけたのだ。」

「みんなで障しょうがいぶつ碍物競争をやろうと思ったんです。」

「あのわなをかけることを、学校では禁じているのだが、お前はそれを忘れていたのか。」

「覚えていました。」

「そんならどうしてそんなことをしたのだ。こう云う工合ぐあいにお客さまが度々たびたびおいでになる。それに運動場の入口に、あんなものをこしらえて置いて、もしお客さまに万一のことがあつたらどうするのだ。お前は学校で禁じているのを覚えていながら、それをするというのはどう云うわけだ。」

「わかりません。」

「わからないだろう。ほんとうはわからないもんだ。それはまあそれでよろしい。お前たちはこのお方がそのわなにつまずいて、お倒れなされたときはやしたそうだが、又私もここで聞いていたが、どうしてそんなことをしたか。」

「わかりません。」

「わからないだろう。全くわからないもんだ。わかったらまさかお前たちはそんなことしないだろうな。では今日の所は、私からよくお客さまにお詫わびを申しあげて置くから、これからよく気をつけなくちやいけないよ。いいか。もう決して学校で禁じてあることをしてはならんぞ。」

「はい、わかりました。」

「では帰って遊んでよろしい。」校長さんは今度は私に向きました。担任の先生はきちんとまだ立っています。

「只ただいま今のようなわけで、至つて無邪むじゃき気なので、決して悪気があつて笑つたりしたのではないようでございますから、どうかおゆるしをねがいとう存じます。」

私はもちろんすぐ云いました。

「どう致いたしまして。私こそいきなりおうちの運動場へ飛び込こんで来て、いろいろ失礼を致しました。生徒さん方に笑われるのなら却かえつて私は嬉しい位うれです。」

校長さんは眼鏡めがねを拭ふいてかけました。

「いや、ありがとうございます。おい武村君。君からもお礼を申しあげてくれ。」

三年担任の武村先生も一寸私に頭を下げ、それから校長に会え釈しやくして教員室の方へ出て行きました。

校長さんの狐きつねは下を向いて二三度くんくん云つてから、新らしく紅茶を私に注ついでくれました。そのときベルが鳴りました。午ご

「後の課業のはじまる十分前だったのでしよう。校長さんが向うの黒塗りの時間表を見ながら云いました。」

「午後は第一学年は修身と護身、第二学年は狩しゅりよう 獵術、第三学年は食品化学と、こうなっていますがいずれもご参観になりますか。」

「さあみんな拝見いたしたいです。たいへん面白おもしろそうです。今朝さからあがらなかつたのが本当に残念です。」

「いや、いずれ又またおいでを願いましよう。」

「護身というのは修身といっしょになつているのですか。」

「ええ昨年までは別々でやりましたが、却つて結果がよくないようです。」

「なるほどそれに狩猟だなんて、ずいぶんこうしよう高こうしよう尚こうしような学科もおやりですな。私の方ではまあ高等専門学校や大学の林科にそれがあるだけです。」

「ははん、なるほど。けれどもあなたの方の狩猟と、私の方の狩猟とは、内容はまるでちがっていますからな、ははん。あなたの方の狩猟は私の方の護身にはいい、私の方の狩猟は、さあ、狩猟前業はあなたの方の畜産ちくさんにでも入りますかな、まあとにかくその時々でゆつくりご説明いたしましょう。」

この時ベルが又鳴りました。

がやがや物を言う声、それから「気をつけ」や「番号」や「右向け右」や「前へ進め」で狐の生徒は一学級ずつだんだん教室に

入ったらしいのです。

それからしばらくたつて、どの教室もしいんとなりました。先生たちの太い声が聞えて来ました。

「さあではご案内を致しましょう。」狐の校長さんは賢かしこそうに口を尖とがらして笑いながら椅子いすから立ちあがりました。私はそれについて室へやを出しました。

「はじめに第一学年をご案内いたします。」

校長さんは「第一教室、第一学年、担任者、武井甲吉」と黒い塗ぬり札ふだの下つた、ばらの壁かべで囲まれた室に入りました。私もついて入りました。その先生は私のまだあわない方で実にしやれたなりをして頭の銀毛などもごく高こう尚しょうなドイツ刈がりに白のモオ

ニングを着て教壇きょうだんに立っていました。もちろん教壇のうしろの茨いばらの壁には黒板もかかり、先生の前にはテーブルがあり、生徒はみなで十五人ばかり、きちんと白い机デスクにこしかけて、講義をきいて居おりました。私がすっかり入って立ったとき、先生は教壇を下りて私たちに礼をしました。それから教壇にのぼって云いました。

「麻あそ生農学校の先生です。さあみんな立たつて。」
生徒の狐きつねたちはみんなぱつと立ちあがりました。

「ご挨拶あいさつに麻生農学校の校歌を歌うのです。そら、一、二、三、」先生は手を振ふりはじめました。生徒たちは高く高く私の学校の校歌を歌いはじめました。私は全くよろよろして泣き出でそうと

しました。誰だたれっていきなり茨海ばらうみ狐小学校へ来て自分の学校の校歌を狐の生徒にうたわれて泣き出さないでいられるもんですか。それでも私はこらえてこらえて顔をしかめて泣くのを押おさえました。嬉うれしかったよりはほんとうに辛つらかったです。校歌がすみ、先生は一寸ちよつと挨拶して生徒を手まねで座すわらせ、鞭むちをとりました。

黒板には「最高の偽うそは正直なり。」と書いてあり、先生は説明をつづけました。

「そこで、元来偽いつはりというのは、いけないものです。いくら上手に偽いつはりをついてもだめなのです。賢い人がききますと、ちゃんと見わけがつくのです。それは賢い人たちは、その語ことばのつりあいつりあいで、ほんとうかうそかすぐわかり、またその音ねですすぐわかり、それから

それを云うものの顔やかたちですぐわかります。ですからうそというものは、ほんの一時はうまいように思われることがあつても、必ずまもなくだめになるものです。

そこでこの格言の意味は、もしも誰かが一つこんな工合のうそをついて、こう云う工合にうまくやろうと考えるとします。そのときもしよくその云うことを自分で繰り返し繰り返して見ますと、いつの間にか、どうもこれでは向うにわかるようだ、もう少しこう云わなくてはいけないというような気がするのです、そこで云いようをすっかり改めて、又それを心の中で繰り返し繰り返して見ます、やっぱりそれでもいけないようだ、こうしよう、と考えます。それもやっぱりだめなようだ、こうしようと思ひます。

こんな工合にして一生けん命考えて行きますと、とうとうしまいはほんとうのことになってしまふのです。そんならそのほんとうのことを云つたら、實際どうなるかと云うと、実はかえつてうまく偽をついたよりは、いいことになる、たとえすぐにはいけないことになったようでも、結局は、結局は、いいことになる。だからこの格言は又

『正直は最良の方便なり』とも云われます。」

先生は黒板へ向いて、前のにならべて今の格言を書きました。

生徒はみんなきちんと手を膝ひざにおいて耳を尖らせて聞いていました。この時いつせい一いっせいにペンをとつて黒板の字を書きとりました。

校長は一寸私の顔を見ました。私がどんな風に、今の講義を感

じたか、それを知りたいという様子でしたから、私は五六秒眼めを
瞑つぶつていかにも感銘かんめいにたえないということを示しました。

先生はみんなの書いてしまう間、両手をせなかにしよつてじつ
としていましたがみんながばたばた鉛筆えんぴつを置いて先生の方を見
始めますと、又講義をつづけました。

「そこで今の『正直は最良の方便』という格言は、ただ私たちが
うそをつかないのがいいというだけではなく、又丁度反対の応用
もあるのです。それは人間が私たちに偽をつかないのも又最良の
方便です。その一例を挙げますとわなです。わなにはいろいろあ
りますけれども、一番こわいのは、いかにもわなのような形をし
たわなです。それもごく仕掛しかけの下手なわなです。これを人間の

方から云いますと、わなにもいろいろあるけれども、一番狐のよく捕れるわなは、昔からの狐わなだ、いかにも狐を捕るのだぞとというような格好をした、昔からの狐わなだと、斯こう云うわけです。正直は最良の方便、全くこの通りです。」

私は何だか修身にしても変だし頭がぐらぐらして来たのでしたが、この時さつき校長が修身と護身とが今学年から一科目になって、多分その方が結果がいいだろうと云ったことを思い出して、ははあ、なるほどと、うなずきました。

先生は

「武巢たけすさん、立って校長室へ行つてわなの標本を運んで来て下さい。」と云いましたら、一番前の私の近くに居た赤いチョッキを

着たかあいらしい狐の生徒が、

「はいつ。」と云つて、立つて、私たちに一寸挨拶し、それから早く茨いばらの壁の出口から出て行きました。

先生はその間黙だまつて待つていました。生徒も黙だまつていました。空はその時白い雲で一杯いっぱいになり、太陽はその向うを銀の円鏡のようになつて走り、風は吹ふいて来て、その緑いろの壁はところどころゆれました。

武巢という子がまるで息をはあはあして入つて来ました。さつき校長室のガラス戸棚とだなの中に入つていた、わなの標本を五つとも持つて来たのです。それを先生の机の上に置いてしまうと、その子は席もどに戻り、先生はその一つを手にとりあげました。

「これはアメリカ製でホックスキャッチャーと云います。ニツケル鍍金めつきでこんなにぴかぴか光っています。ここの環わの所へ足を入れるとピチンと環がしまつて、もうとれなくなるのです。もちろんこの器械は鎖くさりか何かで太い木にしばり付けてありますから、實際いっぺん一遍足をとられたらもうそれきりです。けれども誰たれだつてこんなピカピカした変なものにわざと足を入れては見ないので。」

狐の生徒たちはどつと笑いました。狐の校長さんも笑いました。狐の先生も笑いました。私も思わず笑いました。このわなの絵は外国でも日本でも種しゅびょう苗 目録のおしまいあたりにはきつとついていて、然しかも効力もあるというのにどう云うわけか一寸不思議にも思いました。

この時校長さんは、かくしから時計を出して一寸見ました。そこで私は、これはもうだんだん時間がたつから、次の教室を案内しようかと云うのだらうと思つて、ちよつとからだを動かして見せました。校長さんはそこですつと室へやを出しました。私もついて出ました。

「第二教室、第二年級、担任、武池清二郎」とした黒塗りの板の下がった教室に入りました。先生はさつき運動場であつた人でした。生徒も立つて一ぺんに礼をしました。

先生はすぐ前からの続きを講義しました。

「そこで、でんぷん澱粉としぼう脂肪とたんぱくしつ蛋白質と、この成分の大事なことはよくおわかりになつたでしょう。

こんどはどんなたべものに、この三つの成分がどんな^{ぐあい}な工合に入っているか、それを云います。凡そ^{およ}、食物の中で、^{じょう}滋養に富みそしておいしく、また見掛けも大へん立派なものは^{にわとり}鶏です。鶏は實際食物中の王と呼ばれる通りです。今鶏の肉の成分の^{ぶんせきひょう}分析表をあげましょう。みなさん帳面へ書いて下さい。

蛋白質は十八ポイント五パーセント、脂肪は九ポイント三パーセント、^{がんすいたんそ}含水炭素は一ポイント二パーセントもあるのです。鶏の肉はただこのように^{こと}滋養に富むばかりでなく消化もたいへんいのです。殊に^{こと}若い鶏の肉ならば、もうほんとうに^{やわら}軟かでおいしいことと云つたら、「先生は^{ちよつとつば}一寸唾をのみました、「とてもお話ではわかりません。食べたことのある方はおわかりでしょう。」

生徒はしばらくしんとしました。校長さんもじつと床ゆかを見つめて考えています。先生ははんけちを出して奇麗きれいに口のまわりを拭ふいてから又云いました。

「で一般に、この鶏の肉に限らず、鳥の肉には私たちの脳神経を養うに一番大事な燐りんがたくさんあるのです。」

こんなことは女学校の家事の本に書いてあることだ、やっぱり仲々程度が高い、ばかにできないと私は思いました。先生は又つづけます。

「その鶏の卵も大へんいいのです。成分は鶏の肉より蛋白質は少し少く、脂肪は少し多いのです。これは病人もよく使います。それから次は油あぶらあげ揚あげです。油揚は昔は大へん供給じゅうぶんが充じゅうぶん分ぶんだつ

たのですけれども、今はどうもそんなじやありません。それで、
 実はこれはすた廃れた食物であります。成分は蛋白質が二二パーセン
 ト、脂肪が十八ポイント七パーセント、含水炭素がゼロ零ポイント九
 パーセントですが、これはただいま只今ではあんまり重要じやありませ
 ん。油揚の代りにちかごろさか近頃盛んになったのはとうもろこし玉蜀黍です。これは
 けれども消化はあんまりよくありません。」

「時間がもう少しですから、次の教室をご案内いたしましょう。」
 校長がそつと私にささやきました。そこで私はうなずき校長は先
 に立へやつて室を出ました。

「第三教室は向うの端はしになつて居ります。」校長は云いながら廊
 下うかをどんどん戻りました。さっきの第一教室の横を通りげんかん玄関を

越え校長室と教員室の横を通つたそこが第三教室で、「第三学年担任者武原久助」と書いてありました。さつきの茶いろの毛のガサガサした先生の教室なのです。狩猟の時間です。

私たちが入つて行つたとき、先生も生徒も立つて挨拶しました。それから講義が続きました。

「それで狩猟に、前業と本業と後業とあることはよくわかつたろう。前業は養鶏を奨励すること、本業はそれを捕ること、後業はそれを喰べることと斯うである。

前業の養鶏奨励の方法は、だんだん詳しく述べるつもりであるが、まあその模範として一例を示そう。先頃私が茨窪の松林を散歩していると、向うから一人の黒い小倉服を着た人間の

生徒が、何か大へん考えながらやって来た。私はすぐにその生徒の考えていることがわかったので、いきなり前に飛び出した。

すると向うでは少しびっくりしたらしかったので私はまず斯う云った。

『おい、お前は私が何だか知ってるか。』

するとその生徒が云った。

『お前は狐きつねだろう。』

『そうだ。しかしお前は大へん何か考えて困っているだろう。』

『いいや、なんにも考えていない。』その生徒が云った。その返事が実は大へん私に気に入ったのだ。

『そんなら私はお前の考えていることをあてて見ようか。』

『いや、いらぬ。』その生徒が云つた。それが又大へん私の
 氣に入つた。

『お前は明後日あさつての学芸会で、何を云つたらいいか考えているだろ
 う。』

『うん、実はそうだ。』

『そうか、そんなら教えてやろう。あさつてお前は養鶏の必要を
 云うがいい。百ひやくしやう姓せいの家には、こぼれて砂の入つた麦あわや粟あわや、
 いらぬ菜さいつ葉つばや何か、たくさんあるんだ。又甘藍キャベジや何かには、
 青むしもたかる。それをみんな鶏けいに食べさせる。鶏けいはおよろこ大悦たいえつび
 でそれをたべる。卵たまごもうむ。大へん得だと斯う云うがいい。』

私が云つたら、その生徒は大へん悦んで、厚く礼を述べて行つ

た。きつとあの生徒は学芸会でそれを云ったんだ。するとみんなは勿論もちろんと思つて早速養鶏をはじめめる。大きな鶏やひよっこや沢たく山さんできる。そこで我々は早速本業にとりかかると斯う云うのだ。
「」

私は実はこの話を聞いたとき、どうしてもおかしくておかしくてたまりませんでした。その生徒というのは私の学校の二年生なのです。先頃せんころ学芸会があつたのですが、その時ちやんと、狐あに遭つたことから何から、みんな話していたのです。ただおしまいが少し違つて居りました。それはその生徒の話では

「なんだお前は僕に養鶏をすすめて置いて自分がそれを捕ろうというのか。」と云つたら狐は頭をかかえて一目散に遁にげたという

のでした。けれどもそれを私は口に出しては云いませんでした。

この時丁度、向うで終業のベルが鳴りましたので、先生は、

「今日はここまでにして置きます。」と云つて礼をしました。私は校長について校長室に戻りました。校長は又私の茶ちやわん椀わんに紅茶をついで云いました。

「ご感想はいかがですか。」

私は答えました。

「正直を云いますと、実は何だか頭がもちやもちやしましたので
す。」

校長は高く笑いました。

「アツハツハ。それはどなたもそう仰おつしやいます。時に今日は野原で

何かいいものをお見付けですか。」

「ええ、火山弾かざんだんを見附みつけました。ごく不完全です。」

「一寸ちよつと拝見。」

私は仕方なく背囊はいのうからそれを出しました。校長は手にとってしばらく見てから

「実にいい標本です。いかがです。一つ学校へご寄附きふを願えませんでしうか。」と云うのです。私は仕方なく、

「ええ、よろしゆうございます。」と答えました。

校長はだまってそれをガラス戸棚とだなにしまいました。

私はもう頭がぐらぐらして居たたまらなくなりました。

すると校長がいきなり、

「ではさよなら。」というのです。そこで私も

「これで失礼致いたします。」と云いながら急いで玄関を出ました。それから走り出しました。

狐の生徒たちが、わあわあ叫さけび、先生たちのそれをとめる太い声のはつきり後ろで聞えました。私は走って走って、茨海ばらうみの野原のいつも行くあたりまで出ました。それからやつと落ち着いて、ゆっくり歩いてうちへ帰ったのです。

で結局のところ、茨海狐小学校では、一体どういう教育方針だか、一向さっぱりわかりません。

正直のところわからないのです。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第九卷」筑摩書房

1979（昭和54）年7月

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2006年11月26日作成

2009年7月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

茨海小学校

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>